

vol.01-08
ダイジェスト版

【 酒場詩人・吉田類 責任編集 】

旅人類

北海道の旅情報

大人の好奇心を
満たす旅へ



旅人類
「たびんるい」

vol.01-08 ダイジェスト版

2022年3月26日発行

企画・発行：株式会社ドーコ、札幌市中央区大通西4丁目1番地 新大通ビル TEL.011-801-1565

TAKE FREE

HOKKAIDO LOVE!

LINE公式アカウント

お友だち募集中!

配信の主な
コンテンツは
こちら!

北海道の
観光情報・お得な
情報を配信中!



毎月30名様に
北海道の特産品が当たる

プレゼントキャンペーン

宿泊券から特産品まで、北海道を感じられる
楽しめる景品を毎月30名様に抽選で当たる
定期的なキャンペーンを実施中です!

宿泊割引やふるさと納税など
お得な情報を配信

お得な情報・キャンペーン情報

北海道地域限定の宿泊割引の配信やアンケートに
答えてゲットするキャンペーン、ふるさと納税など各
種キャンペーンやお得な情報を配信しています!

全道各地の観光情報を
定期的に配信

観光情報の配信 旅ログ

キュンちゃん各地取材してブログ配信!
定番情報からローカルな内容まで紹介するよ~!

期間限定のイベントなど
旬な情報を配信

観光情報の配信 今が旬

四季折々に様々変わる北海道の旬な情報を
お届けします! 期間限定のイベント情報や、紅葉
や桜などの自然鑑賞のお知らせするよ~!

LINE 今すぐ簡単登録!

1. LINEアプリを起動
2. 右記QRコードをコードリーダーを立ち上げ読み取る
3. LINE公式アカウントを登録
4. 登録完了! キュンちゃんから北海道の観光情報が届くよ~!



北海道公式観光サイト

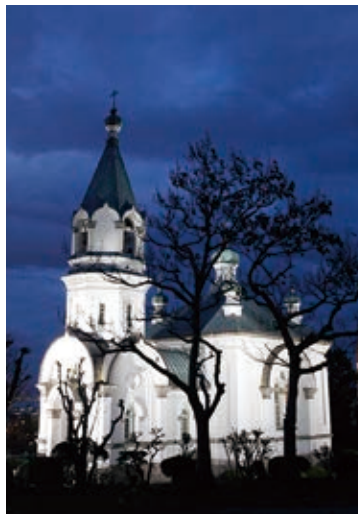
HOKKAIDO LOVE!

北海道公式観光サイトもリニューアルオープン!

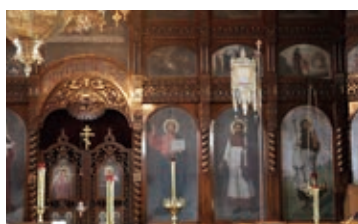
絶景やグルメ、文化など北海道の観光情報をチェック!

北海道観光振興機構





祈りの際に鳴る鐘の音は、環境省の「残したい日本の音風景100選」に選ばれている。



ここで最初に洗礼を受けた日本人の中には、類さんの故郷・土佐出身の沢辺琢磨もいた。

函館ハリストス正教会

函館市元町3-13
TEL.0138-23-7387



坂の一つひとつに名前がある。「チャチャ登り」のチャチャとは、アイヌ語でお爺さんのこと。



祈りの鐘が響く元町へ。



ライトアップされた元町の教会群。



函館 聖ヨハネ教会

昭和54年完成の現代風の外観は、上から見ると十字架に見える。明治7年(1874)に英国のデニング司祭が函館で宣教活動を始めた。

函館市元町3-23
TEL.0138-23-5584
内観公開は4月28日～11月3日
市電「十字街」停留場より徒歩15分

朝食を食べに入った喫茶店の壁に、何気なく飾られていた一枚の古写真が、類さんを惹きつけた。明治23年(1890)の函館市街を、函館山の中腹から見下ろした写真である。わずか22年前まで江戸時代だったとは思えない、それどころか、維新の激しい戦いの舞台だったとは信じられない、賑やかで平和な都会の風景だ。

「この時代、札幌はまだ田舎町で、文化が函館に集まっていた様子が分かりますね。元町の辺りには既に教会も見えます。そう、今日は函館の発祥の地でもある元町から歩き始めることにしましょうか」

十字街まで市電に乗り、並木が美しい二十間坂を登りきって右を向けば、『カトリック元町教会』を正面から見る格好になる。雄鶏のある百尺の尖塔が最も映える角度だ。

このゴシック様式の塔と道一本を隔てて、ロシア風建築の『函館ハリストス正教会』があり、その隣には『函館聖ヨハネ教会』のモダンな外観が連なるのが面白い。さらに言えば、付近で一番大きな建物は、純和風の仏閣・東別院だ。いかにも日本らしい眺めではないだろうか。

函館。異国情緒と歴史の街を歩く

北海道の近代は、函館から始まった。時代の転換期の悲壮な戦いの跡も、いち早く伝えられた西洋文化の香りも、ここにはある。ハイカラと郷愁とが同居する街を、まずは歩こう。

カトリック元町教会

最初の木造の聖堂が創建されたのは明治10年(1877)。二度の焼失を経て、現在の建物は、大正13年(1924)に再建されたもの。聖堂内の祭壇は、再建時にローマ法王から贈られた。

函館市元町15-30 TEL.0138-22-6877
10:00～16:00
無休(日曜の午前中、礼拝時、聖堂使用時は見学不可)
拝観料／無料 市電「十字街」停留場より徒歩10分

旅人類
01



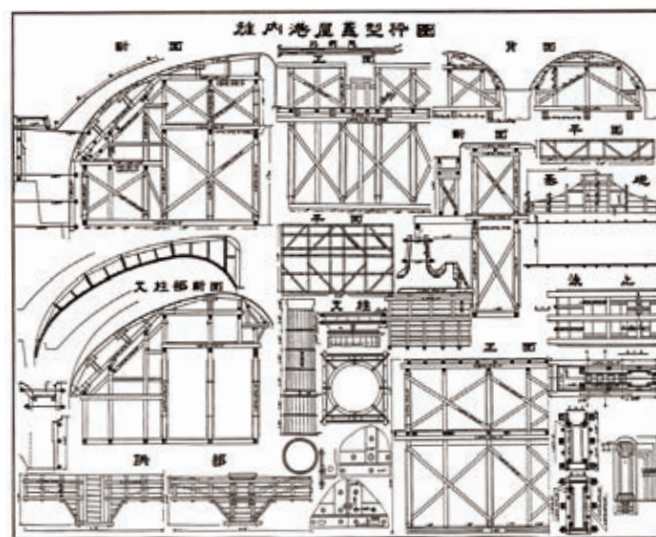
その昔、
樺太に渡る人々は、
稚内で汽車から
連絡船に乗り換えた。



現在の稚内駅。かつて防波堤ドームまで延びていた鉄路はもうない。



昭和13年(1938)頃の稚内棧橋駅と稚泊航路乗船出入口。(稚内開発建設部提供)



ドームの屋根に滑らかな曲線を出すための木枠の設計図。(稚内開発建設部提供)

当初の棧橋にはドームがなく、人や車両には強風と波が容赦なく襲い掛かった。はつきりとした記録はないが、流された人もいたと地元では言い伝えられている。様々な安全対策が検討された結果、ドーム型の屋根で覆うことが計画された。北海道庁が若干26歳の若き技師、土谷実にその設計を命じたのは、昭和6年(1931)1月。着工期日まで3カ月しかなかったが、彼は見事にやつてのけた。しかも、それは世界にも類を見ない美しいデザインだった。

戦後、連絡船が廃止されると、ドームは石炭置場として一時使われながらも、街の発展の基礎を築いた歴史遺産として後世に残されることになった。厳しい自然にさらされて損傷が激しかったが、昭和53年(1978)には原型通りに復元。今も港や駅を風と波から守りながら、市民や観光客に親しまれている。

稚泊航路があった時代、汽車と船との間を人々が忙しく動き回っていた様子を想像しながら、類さんはドームの歩廊を歩いた。

太い円柱と曲線のフォルムの美しさは、時代を超えて愛され続けている。

天塩川の河口から、さらに北に足を延ばす。日本最北の街、稚内。海峡を隔ててロシアと国境を接するこの街には、旅人の心の深い部分を掴む、不思議な魅力があった。

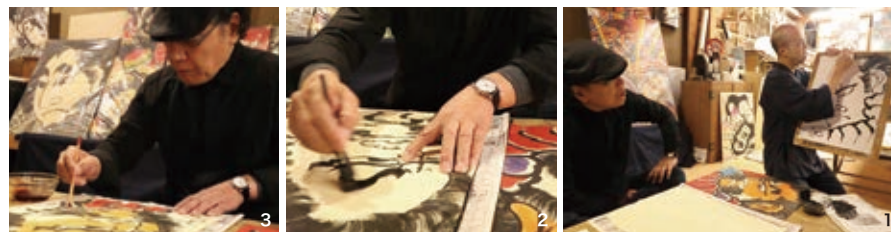
そして最北の地へ。
国境の街、稚内を歩く

旅人類
02

終着駅という言葉には、それだけで旅情を誘う力がある。それも、日本の線路の北の果てともなれば、なおさらだ。

大正12年(1923)から昭和20年(1945)まで、この駅と樺太の大泊駅(現・コルサコフ駅)とを結ぶ稚泊航路があった。連絡船が発着した棧橋の名残が、今も古代ギリシア建築の柱廊のような姿を見せる稚内港北防波堤ドーム。往時には、棧橋の先にあった仮乗降場・稚内棧橋駅まで鉄路が延びていたのだ。

武士の魂が宿る伝統の「津軽風絵」を描く。



1.まずは職人の溝江さんがお手本を描きながら、風絵のポイントを教えてください。
2.輪郭や顔のパーツを筆で描き、髪や眉、ひげは刷毛を使って描く。
3.歌舞伎の隈取りのように、余白を残して色を付けていくのがコツ。
4.完成！ひげを蓄えた勇壮な武者は、源為朝がモデルなのだとか。
〔左ページ〕類さん作の津軽風絵。左下には、画家バージョンの類さんのサインが記されている。



津軽藩ねふた村

青森県弘前市亀甲町61
TEL.0172-39-1511
9:00～17:00 無休
大人550円、中学・高校生350円、
小学生220円、幼児110円
※ショッピングエリアのみ利用の場合は入場無料

「吊りこま」など
約15種類の製
作体験を実施。



鮮やかな色漆が雲状に浮かび上がる「津軽塗」や、麻布に幾何学的な刺繍を施した「こぎん刺し」など、さまざまな民芸・工芸品の伝統と技が、今もしっかりと息衝く弘前。『津軽藩ねふた村』内にある津軽蔵工房「たくみ」では、その製作風景を間近に見学でき、体験も気軽に楽しめる。今回、類さんが挑戦したのは「津軽風絵」。もともと津軽藩の下級武士が困窮から逃れるため、手内職として風を作り、町民たちに売ったのが始まりといわれている。幕末から明治初期にかけて盛んに作られ、浮世絵や三国志などの挿絵を元にした「武者絵」を描くのが特徴だ。

まずは、職人が描いた大首絵を手本に、筆で輪郭や目鼻を描いていく。筆圧を調整しながら「とめ」の点を強調して描くのがポイントなのだが、画家であり、イラストレーターでもある類さんは、さすがに手練の筆さばき。「力強いタッチで躍動感がありますね。初めてとは思えないですよ」と、職人の溝江由樹さんも脱帽する。

筆で墨を入れたら、今度は「牡丹刷毛」と呼ばれる刷毛を使って、髪の毛やひげを描く。徐々に出来上がる勇壮な武者の顔。向き合う類さんの表情は、二筆ごとに引き締まり、すっかり風絵の世界の中へ。墨を乾燥させた後は、カラフルな染料を使い、色付けをする。「額や頬などは、少し白地を残すと立体感がですよ」。溝江さんの言葉に頷きつつ、真剣に筆を運ぶ類さん。

完成した風絵は、雄々しく堂々たる出来栄で、類さんも「生きているね！」と思わず笑みがこぼれる。津軽風絵には武士の魂が込められているそうだが、類さんもその魂を受け継いでいるのかもしれない。

山と海と、 共に生きる

日高を巡る旅人は、山と海の圧倒的な存在を常を感じるようになる。視線を上げれば、北は狩勝峠から南は襟裳岬まで、1500〜2000m級の山々が約150kmにわたって連なる日高山脈。北海道の背骨と呼ばれるその壮麗な姿から海岸線へ目を移すと、江戸時代から昆布や鮭の好漁場として知られてきた太平洋が、水平線の果てまで伸びやかに広がっている。

豊かな山林がもたらす森林資源、そして日高沖で揚がる海の幸——。そんな自然の賜物が、この地に生きる人々の暮らしを長く支えてきた。

今回の旅は、日高を象徴する「山と海」をキーワードに始めてみたい。それはきつと、自然と共にある人々の力強さや、この土地が歩んできた歴史を感じるものになるはずだ。

まずは、世界的にも希少な自然環境から平成27年（2015）にユネスコ世界ジオパークに認定された『アポイ岳ジオパーク』の中心地、アポイ岳へ向かう。目的はもちろん登山。山男でもある類さん、その頂を見つめる瞳は輝いていた。

峻険な山々が屏風のように連なる日高山脈と、豊かな水産資源に恵まれた太平洋。日高の魅力を知る上で、山と海は欠かせないテーマである。まずは日高山脈の西南端、名峰・アポイ岳を目指す。



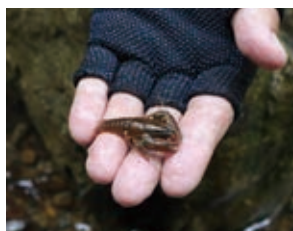
類似町の海岸から、これまで何度も登頂してきたアポイ岳を遠望する類さん。

実は類さん、これまで何度もアポイ岳に登っている。ガイドを務めてくれる『アポイ岳ジオパークビジターセンター』の学芸員・田中正人さんとも顔なじみで、挨拶もそこそこに登山口へ。田中さんは10歳からアポイ岳に登っているベテランガイドで、既に700回以上は登頂しているという。

「小さい頃からアポイ岳を見上げて育ってきました。類似の人々にとってはとても身近な存在。故郷の山ですね」と田中さん。

標高810mの山ながら道のりは

長く、山頂まではおおよそ2時間半、3時間半。4合目までは緩やかな登りで、林の中をのんびり進んでいく。歩きながら、田中さんがアポイ岳を希少たらしめる「橄欖岩^{かんらん}」について説明してくれた。アポイ岳全体を形成する橄欖岩は、地殻下のマントルの一部が約1300万年前のプレート衝突で突き上げられ、地上に出ってきたもの。ほとんど変質せず露出している例は珍しく、地球深部の情報を有する貴重な地質として、学会からも注目されているという。



第4休憩所の沢には絶滅危惧種のニホンザリガニが。
※持ち帰りは厳禁



さあ、登ろう

アポイの自然が、心と体を解き放つ。



ジオパークとは特殊な自然環境や歴史文化に触れられる「大地の公園」。



3合目でクマ除けの鈴を盛大に鳴らす。頂上まであと2.2km、まだ先は長い。



土の下は橄欖岩の塊だ。根を深く張れないので、台風などが来ると木が倒れてしまうという。

釧網本線、 途中下車の旅

網走の旅は、各駅停車の鈍行でのんびり、
オホーツク海沿岸を巡るところから始めてみたい。
車窓に広がる真っ青な海、そして各駅での忘れられない出会い。
一両列車の揺れに身を任せて、気の向くままに。

鉄道はなぜ、こうも旅人の心をかき立てるのだろう。飛行機は今やただの移動手段だが、鉄道にはまだ、旅のロマンが残っているからか――。

「ずいぶんかわいらしい佇まいだね」。ホームにポツンと停まっている、これから乗車する二両編成の列車に目をやり、類さんがつぶやく。

網走と釧路を結ぶ鉄路・釧網本線。まずは網走駅から7駅先の止別駅まで向かう。車窓から広々としたオホーツク海を眺め、駅舎を利用した食堂や喫茶店を巡って、プチ鉄道旅を満喫しようという心積もりだ。

発車までまだ時間があるので、少し駅舎の周りを歩いてみる。網走駅の開業は大正元年（1912）。以前はもともと市街中心部にあったが、昭和7年（1932）に現在地へ移設されている。ちなみに、網走駅に掲げられた駅名看板は、珍しい縦書きである。これは網走刑務所を出所し、網走駅から故郷へ帰る元受刑者たちへ「この縦書き看板のように横道にそれることなく、真っ直ぐに歩んでほしい」との願いが込められた

もの。「刑務所のある街らしい、心温まるエピソードだね」と類さん。

顔ハメ看板の監獄版でちよつとお茶目な一枚を撮影し、駅の売店で冷えた缶ビールを買い込みホームへ。

発車時刻が迫ると、車内はバックパッカーらしき外国人や地元の住民などでびっしりに。途中に知床斜里駅があるだけに、観光客の姿が多いが、なかなかどうして、地域の足としての役割を大きく担っている。

定刻となり、車両がゆっくり動き出す。網走市街を進むとすぐに桂台

駅。そして桂台駅を後にしトンネルを抜けたところで、オホーツク海が目の前に開けてきた。とはいえ、鱒浦駅まではまだ人家の間に時折り海が覗ける程度。でもそこから先は、オホーツク海の広闊な景色が車窓を彩る。缶ビールを片手に、景色に入る類さん。晴れた日には知床半島の山並みまで望見できるといふ。

北浜駅を過ぎると、海は砂丘で隠れてしまいが、代わりに右手に濤沸湖が見えてくる。オホーツクの広漠とした景観が目飽きさせない。

網走駅舎の前には、およそ5世紀～12世紀にオホーツク文化を形成したモヨロ人／オホーツク人の像がある。



網走駅にあるユーモアあふれる顔ハメ看板。ここまで来たからには、恥ずかしがらず撮影するべし。

広過ぎる景観は、時に人を無口にさせる。そんな時は、ただビールを飲むのがいい。

列車に揺られ
オホーツクに行く。

空と川、 旅はここから始まる

空知の歩みをたどるなら、開拓の歴史の中で大きな役割を果たした石狩川の存在は欠かせない。空知で暮らす人々とその営みを訪ね歩く類さんの旅は、石狩川流域を眼下に収める滝川上空からスタートする。

吉田類、
空へ！

「空知の風を感じたくて、窓を開けさせてもらったんだ。気持ちよかったねえ。まるで自分がグライダーと一体になったような気がしたよ」

翼が長く、胴体は流線型。エンジンを積まずに重力と気流を利用して自在に空を旅するグライダーは日本の航空法上、滑空機と呼ばれる。飛行というよりも滑翔、つまりグライダーは空を滑って翔けているのだ。

「地上からは優雅に見えますが、コックピットではパイロットが懸命に操縦しています。大切なのは自分の五感で風を感じることですね」。そう話すのは『たきかわスカイパーク』のフライングインストラクター・清水拓智さん。今回はドイツ製の複座機の前の座席で清水さんが操縦し、類さんはその後部座席に搭乗した。

空知の取材を始めるに当たり、まずは上空から石狩川とその流域を眺めてもらおうという趣向だったが、果たして、類さんの反応がいかに。

「絶景。ヤミツキになりそう」

着陸後の第一声がこれで、実は類さん、空が大好きなのだ。

ピンネシリから暑寒別岳へと連なる起伏に富んだ山々、滝川市街の整然とした街並み、森林や田畑の生命力に満ちた緑、そして豊かな水量をたたえながら大きくうねって流れていく石狩川の圧倒的な存在感。

眼下の地形が手に取るように分かる500mの上空からは、リアルな大地の実像が見えてくる。

「北海道の空は奇麗で、透明度も抜群だといわれています。内陸部にある滝川は長距離飛行でその全道の空をカバーする拠点としては、最適の位置なんです」と清水さん。

動力を持たないグライダーは、空の上では独特の静寂に包まれる。聞こえるのは風切り音のみ。エンジン音が響いて声が通らない小型飛行機との大きな違いでもある。

広い北海道をいきつ戻りつしながら旅を続けていると、時に空間や距離感の認識を見失ってしまうことがある。そんな時は目を転じて、空を見上げてほしい。青空を背景にグライダーの白い機体が音もなく舞っていたら、そこはきっと空知だ。

行きつ戻りつ 小樽 時空旅行

北海道を代表する港町・小樽で、
時を巡って行ったり来たり。
隆盛を誇った炭鉄港の足跡をたどり、
地元の酒場の人と大いに杯を交わす。
歴史と出会いに思いを馳せて、
訪ね歩いた類さん流の小樽旅行記。



夏の小樽運河は爽快そのもの。久しぶりに散策路を歩いたという類さんは、倉庫群を背にリラックスした様子でこのポーズ。

小樽ほど、時代の趨勢に翻弄され、
劇的な浮き沈みを繰り返してきた
町は少ないかもしれない。
江戸時代から明治、大正にかけ
ては鯉漁で栄華を極めた。しかし昭
和30年ごろ、この魚はなぜか突然、
近海から姿を消してしまう。
続いて炭鉄港※。列強に負けじと
急速に近代化を推し進める明治政
府は、空知地方で炭鉱を開山。その
石炭を運ぶために莫大な予算を投
じて鉄道や港を整備した。小樽には
当時の産業遺産が多数残されている。
昭和から平成にかけては、観光
ブームだ。国内の旅行者からインバウ
ンド客へと、時勢に合わせてターゲッ
トを変えながらも、観光を産業と
して成立させてきた先駆的なエリア
であることは論をまたないだろう。
これらの時代ごとのさまざまな痕
跡や記憶が幾層にも積み重なるこ
とで、ロマンとノスタルジーあふれる
独特の町並みが形成された。
句会やテレビ番組の収録などで何
度も足を運んでいる類さんにとつても、
思い出が詰まった大切な町だ。

※ 近代北海道を築く基となった三都(空知・室蘭・小樽)を、石炭・鉄鋼・港湾・鉄道というテーマで結ぶことにより、人と知識の新たな動きを作り出そうとする取り組み。



日本銀行旧小樽支店金融資料館は荘重たる明治最後の建造物。類さんが歩く歩道の傾斜に注目を、小樽が「坂の町」と呼ばれる由縁だ。

小樽運河は大正3年(1914)に着工し、同12年(1923)に完成した港湾施設。その頃は沖合に停泊した大型船との間は「はし船」と呼ばれる小さな船を駆使して荷物を運搬していたが、より効率的な輸送を目指し、海岸を埋め立てて造成された。現在は小樽の象徴的な観光スポットとして整備されている。

小樽は絵になる坂の町。
多くの文学や映画、漫画、歌謡曲の舞台になってきたこの町では、歴史的建造物や景観を共有財産と

して保全しようという機運が脈々と受け継がれている。例えば旧手宮線跡地を散策してみると、観光客の姿だけでなく、地元の人たちが生活道路として利用している姿がある。類さんもじつくりと時間をかけて巡るのは久しぶりとのこと。今回は往時の繁栄の記憶をたどり、懐かしい人々との再会を果たす。もちろん新たな出会いや、後志らしい美味と酒もたつぷりと。夏の小樽を隅々まで歩いた、類さんならではの旅にご同道あれ。

歩きに歩いてどこまでも、

歴史と出会いの小樽旅。

まさに一望。天狗山の展望台からは小樽の町並みと港の全貌を見渡せる。



絶景かな！

北都・札幌を かたちづくるもの

明治期に北海道開拓の拠点が置かれて以降、目まぐるしく変貌を遂げてきた札幌市。その大都の成り立ちを知り、開拓期の歴史を訪ねると、札幌をかたちづくった原点が見えてきた。

旅人類
08

約197万人もの人口を擁し、北海道の政治、経済の中心地として発展を続けてきた北の大都・札幌市。類さんとの札幌逍遙は、その歴史をたどることから始めてみたい。

北海道の他地域と同様、札幌周辺にも先史時代から人が暮らしており、近世・近代のアイヌ文化期には、アイヌ民族のコタン（集落）が点在していた。江戸末期、松浦武四郎の推薦により、幕府が北海道開拓の拠点

に札幌の地を選定。大友堀（現在の創成川の一部）を作った大友亀太郎など、各地からの移住者による農業開拓が盛んに行われた。とはいえ、その規模は微々たるものであった。

明治2年（1869）、札幌に開拓使が設置され、本格的な市街地整備が始まる。大規模開拓に成功したアメリカからホーレス・ケプロンやウィリアム・S・クラークなど多くの御雇い外国人を招き、都市建設や近代産業の導入、人材育成に力を注いだ。そんな開拓期の象徴ともいえる建物が、**赤レンガ**の愛称で知られる『北海道庁旧本庁舎』である。明治19年（1886）、北海道庁が設置されたことに伴い建設され、同21年（1888）に竣工。アメリカ風ネオ・バロック様式の豪壮な建物で、軟石やれんが、木材など建材の多くは道産材が使われている。塔頂部までの高さは33mあり、高層建築がほとんどない当時は、まさに威風凛々を払うように聳えていただろう。

明治42年（1909）に火災で内部と屋根を焼失するも、外壁のれん



北海道・札幌の歴史と共に歩んできた『北海道庁旧本庁舎』。

ビル群の狭間に、 開拓時代の 面影を探す。

がには損傷がなく、同44年（1911）に再建。昭和43年（1968）、北海道100年を記念して創建時の姿に復元され、同44年（1969）には国の重要文化財に指定された。札幌市内には北海道庁旧本庁舎をはじめ、札幌農学校（現・北海道大学）の演武場として明治11年（1878）に建てられた『札幌市時計台』、開拓使の貴賓用ホテルとして明治13年（1880）に完成した『豊平館』と、開拓期の建物が現存している。歴史を重ねてきた建物を巡り「札幌胎動の息吹が、まだ残っているね」と類さん。開拓の熱気を肌で感じていた。



国内最古の時計塔として、今も鐘の音を響かせる『札幌市時計台』。



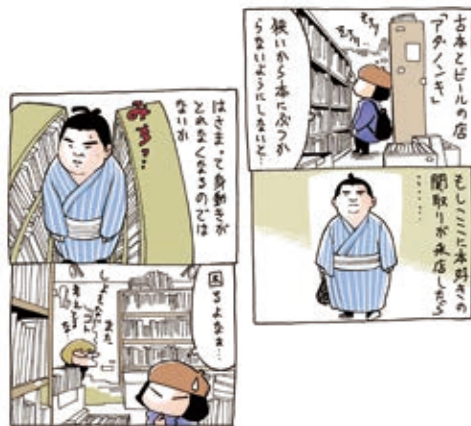
平成24年（2012）からの5年に及ぶ改修で、建築当時の姿により近づいた『豊平館』。



漫画「2つの言葉」 作/森雅之
——北海道大学とクラーク博士
「2つの言葉」——



漫画家夫婦
レコードと古本、
ビール巡りの旅へ
文/イラスト/和泉晴紀
4コマ漫画/山崎紗也夏



兄弟ユニット『Q. B. B.』が行く!
札幌&近郊、
シブさ噛みしめ巡礼旅
文/久住昌之 イラスト/久住卓也



ニシカワ ヨシエが切り撮る
SAPPORO



札幌の
ディープ
酒場街をゆく
文・写真/藤木TDC



早逝した戦前の画家・三岸好太郎と
その偉業を伝える美術館
文・写真/巖谷國士



それは道づくりから始まった。
定山溪温泉物語
文・写真(一部)/松田法子



大人の北海道旅情報誌「旅人類」好評発売中!
酒場詩人吉田類がナビゲート。

吉田類さんが北海道をじっくり巡る大人の旅ガイド。
その土地の歴史や文化、大自然の恵みに触れ、
地元の人々に長く愛される酒場を訪れる、
今までになかったディープな旅を提案します。



定価
1,100円
(10%税込)

※Vol.01~03は
定価880円
(10%税込)



発行/株式会社 共同文化社 企画/株式会社 ドーコン(総合建設コンサルタント) 発行エリア/札幌圏および道内各地・首都圏の一部書店
【amazonでも購入できます】詳しくは [アマゾン 旅人類](#) 検索